YO!!
MAI
PAN TO CIRCUS
MONOGATARI

パンとサーカス物語――一、二〇〇円

著　者――楠田枝里子（くすだえりこ）

編集人――杉林　昇

発行人――堀内　稔

発行所――読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇―五五
大阪市北区野崎町八の十　〒五三〇
北九州市小倉区明和町一の十一　〒八〇二

印刷所――大日本印刷

製本所――ナショナル製本

第一刷――一九八八年（昭和63年）四月三十日

© 楠田枝里子　昭和六十三年
落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

ISBN 4-643-88045-7　C0095
Printed in Japan

パンとサーカス物語

●目次●

1 クレー色の思い出……5
2 けどものこども……11
3 明けまして、サーカス……16
4 エイズ・エイジ……21
5 記憶のネットワーク……26
6 されど、ペンツの男……31
7 馬の方が、ずっといい……36
8 水上レストランの惨劇……42
9 夜のバレリーナ……47
10 言葉のサトウルヌス……53
11 日本麺類試験……58
12 東京湾には龍が眠る……63
13 流行あいうつ……68
14 若草色の手紙……73
15 取材をめぐる幸不幸……78
16 売れる健康法には、ウソがある……83
17 光を飼う牧童たち……89
18 ゆらぐ春に、シュパーゲル……94
19 ガウディの春……100
20 アニミズムの街……105
21 クラウン・フェスティバル……110
22 うわさのうわさ……115
23 彗星好みのシャーベット・ビール……120
24 家なき子たちの憂鬱……125

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

25 午前二時の月明かりにて……130
26 始まりはバックギャモン……135
27 ウナギの日は、私の日……140
28 運のいい話……145
29 いまどきの人間の騙し方……150
30 空力係数の低い女……155
31 私の子供を紹介します……160
32 入れ子細工の旅……165
33 道化の晩餐……170
34 プラネタリウムに夜は更けて……175
35 涙の中身……180
36 恐竜の卵はいつ孵る……185
37 アホウなのはどっちか……190
38 星の翁とツィゴイネルワイゼン……196
39 早熟の天才……202
40 ベネチアで骨になった彫刻家……207
41 飛んでるキノコ……212
42 UNKOクリスタリゼーション……217
43 三種の歯ブラシ……222
44 年越おでん……227
45 仮免許皆伝……232
46 宇宙でトイレにはいる法……237
47 ソロモンの指環……242
48 道化師たちの夜……247
49 影のない子供たち……251
あとがき……257

イラスト：日比野克彦
装丁：長友啓典

1　クレー色の思い出

乗客は五、六十人。ちっぽけな飛行機である。金髪をきりっと後ろでまとめたスチュワーデスがひとり、さっきから忙しそうに行ったり来たりしている。

バーゼルの空港を飛びたってから、彼女は一時もじっとしていない。

緊急時の避難用具の説明をする。おしぼりを出す。飲み物のワゴンを押して、サービスにまわる。ちょうど夕方のフライトだから、機内食も配らなければならない。いかにもドイツ系スイス人らしく、勤勉に仕事をこなしている。

そして今、通りがけに、私がこの原稿を書いているのに気付くと、身を座席の方に乗りだし、読書灯のスイッチをいれてくれた。

私があわてて

「ダンケ」

と礼を言うと、にっこり笑みを返して、また慌ただしくトレイを運んでいった。

私は明かりをつけることも忘れるほど、ぼんやりしていたのだ。

足元には、昨日買ったばかりの、青と緑のブーツ。微妙に彩度、明度の違う幾種類かの色の断片が、思い思いに飛び跳ねながら、はぎあわされている。

私は、テレビの特別番組の取材で、バーゼルの美術館にやってきた。ここは、現在公開されている公立美術館としては世界最古といわれ、とりわけその現代美術のコレクションで知られている。

前もってのコメントは準備せず、最初に浮かびあがった印象を大切にしようという撮影方法をとったため、私は突然、クレーの絵のぐるりと取り囲む展示室になげいれられた。

幼い頃からクレーの絵にひかれ、画集を眺めて過ごしてきた私である。もちろん、その作品の前に立つことも初めてではない。

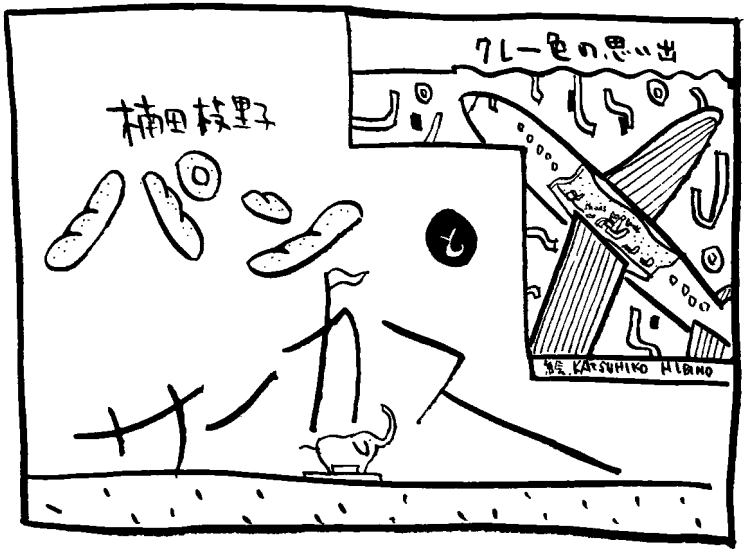
なのに私の膨れあがった感情は、体のわくにおさまりきれず、みるみる皮膚からも溢れでていくのがわかった。

何とかこの気持ちを伝えなければ、と口を開こうとするのだが、涙が言葉をさえぎった。

プロとしては全く恥ずかしいことながら、撮影を途中で止めざるをえない状態になってしまったのである。

私は、初めてクレーの絵に出会ったときのことを、思い出していた。

私は高校生だった。



神奈川県立美術館でパウル・クレー展が行なわれると知り、何としても見にいきたいと、気持ちを押さえることができなくなった。私の育った田舎の町には、当時美術館も画廊もなく、それまではただ画集を毎日のように見つめながら、思いをふくらますしかなかったのだ。

両親を説き伏せ、私は生まれて初めて、ひとりで旅をした。伊勢から名古屋まで、近鉄で。さらに東海道線で、東京へ。

暑い夏だった。私は白のブラウスに紺のスカートという制服姿だ。東京で叔母と待ち合わせ、鎌倉へ向かう列車に乗った。

叔母といっても、年齢も四歳ほどしか違わぬ、仲の良い姉のような人である。前の年まで、うちで一緒に暮らしていて、ふたりでよく好きな絵の話などしたものだ。

私たちは連れ立って、緑にもえる林の中の美術館に入っていった。

しかし、ふたりとも、クレーの作品世界があんなにも激しく、あんなにも直接的に襲いかかってくるとは、想像だにできなかった。受けとめる器もなく、私は嵐の中で、揺さぶられるがままになった。

特に「少年の性のめざめ」という絵には、圧倒された。まだ表情にあどけなさの残る少年が、格子様の森のはしに立っている。森の中には、解体された性的なフォルムが、暗号のようにちりばめられているのだ。体が熱くなり、鼓動すら聞こえた。少年は、あの時代の私自身でもあったのだろう。

他にも「ゲルストホーフェンの思い出」「落日の風景」など、一九一〇年代後半から二〇年代頭にかけて描かれた作品が妙に気にかかり、その前に私は釘付けになった。

魔法にかけられたように、叔母と私は、次の日も、また次の日も、クレーに会いに行った。

それから、七、八年後。

再び鎌倉に、クレーの作品が集められるという話を聞いた。

私は大学を卒業し、東京で就職して働きはじめていた。

叔母はもう、この世の人ではなく（その後しばらくして、卵巣癌を患い、二十七歳で亡くなった）、横須賀線の電車に揺られる私の隣りには、ボーイフレンドがいた。

前回と重なる、かなり多くの絵に再会したが、不思議なことに「少年の性のめざめ」は、随分と落ち着いてみえた。何だか自分自身、行き過ぎた過去の一日をふりかえりみるような、そんな思いであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

それにかわって、晩年に描かれた天使のシリーズに、私は心ひかれた。

「まだ手探りしている天使」「哀れな天使」「死の天使」……。皮膚硬化症に冒されたクレーが、黒い太い線で、まるで子供の落書きのように描きあげていった天使たち。なぜあんなにも魅せられたのかを考えると、少し辛い思いがする。

私は彼と、美術館のカフェで、お茶を飲んだ。

そうして、それからまた七、八年の歳月が流れた。

私ははるばるスイスまでやってきて、クレーの絵と対面したのだ。

時も空間も一瞬のうちに飛びこえて、みるまに心が溶けていく。

今回は、高校生の頃打たれた絵から、もっともっと繊細な波が押し寄せてくるのを感じた。作品自体はいつまでも変わらずにあるけれど、その世界に包みこまれる私自身がこんなにも変わっているのだ。

私が熱心に語りかければ答えを返してくれる。心を閉ざせば静かに沈黙する。絵は、みる者のその時々の心を映しだす、鏡のようなものだ。

「この絵のなかに帰っていける」

そんな安らかさを、私はクレーの作品に見いだすことができた。そしてそう思ったら、たまらなくなって、涙がこぼれおちてしまったのである。

クレーの日記の最後の覚え書きに、次のような一節がある。

「この世では私の存在はとらえられぬ。

私は、未だ生まれぬ子らと同じく、
死者のもとに棲んでいるのだから」
この世に棲み家を持たぬ人の描きだした世界に、私は帰ってゆけるとは、どういうことだろう。私がまだ大人になりきれぬ、大いなる子供ということなのか。

この風変わりなブーツは、美術館の帰り道、靴屋のウインドーで見つけたものだ。私にはそれが、クレーの絵の中から抜け出てきたとしか思えなかったのである。
機長のアナウンスに、私は前のテーブルをたたんだ。読書灯の光線がそのまま落ちて、クレーの靴を照らしだす。足元が青と緑ににじんでいる。この靴をはくたびに、私はバーゼルの美術館を思い出すだろう。
スチュワーデスが最後のお茶を片付けおわり、機体が少し傾きはじめた。あと十五分で、パリだ。

2　けどものこども

先週、車中でラジオを聞いているうち、あまりのことに、ついメモまでとってしまった。

「ハワイに中山美穂さんといくんで、楽しみにしていくんですけども、あったかいから、体が焼けると思うんですけども、それに、いつか家族と一緒にいけたらいいなと思うんですけども……」

途中でついていけなくなって、メモはギブアップ。数えてみると、彼女は三十秒間に六回も、「けども」を連発していた。なんと、五秒に一回。

それまでにも気にはなっていたのだが、これほどあからさまに使われているのを耳にしたのは、初めてだ。

今週もしっかりモニターしてみると、「けども」はまた何度も繰り返されている。

彼女はアイドルタレントらしく、仲間言葉で自然に喋っているつもりなのだろう。

しかし、通常の会話では「……ですけども」と前後の文章をつなぐことなど、ほとんどない。ひとつひとつ途切れて、相手の反応によって、次の文章が接続詞ぬきで連なっていくもの

だ。

「ハワイに中山美穂さんと行けるのよ」

「エーッ」

「あったかいから、体が焼けてしまうわね」

「ウソみたい」

「家族といけたら、いいのに」

「ホント」

とまあこんな具合だろう。

明るくて魅力的なキャラクターだった彼女は、DJに起用されることになったが、いざマイクにむかうと、どうも勝手が違う。話を受けてくれる相手がいないのだ。

友達気分で軽ーくやって下さい、とディレクターから指示がでる。相づちだけでも打ってくれる人がいればいいのに。喋りたいことは、こーんなにあるのに。

そこで彼女は、次々に出てくるセンテンスを、けども、けども、と連ねることになったのではないだろうか。

私、探偵エリコは、まず推理の第一歩を、こうに違いないと確認したのであった。

ただ、不思議なのは、彼女がおそらく何週間にもわたって、ためらいなく「けども」を重ねていることだ。聞いているディレクターも、ほぼ同世代で、全く苦になっていないのだろうか。

私の好奇心は、ムックリ首をもたげて、けども探しに奔走したのである。

そうしたら、いるわいるわ、けどもの使い手が。

大学でたてくらいの若いレポーターたち。それも、ＮＨＫふうにポにアクセントをつけリポーターと自ら名乗る人には、この例をみず、レポーターと平担に発音する人たちに多い。

ミスＤＪと呼ばれる人たち。

圧倒的に女性が多いのだが、加えて、アイドルタレントと称される男性たちも。

こういった人たちが、ちょっと気どって、余分な情報をつけ加えたいとき、構文を考える暇もなく、センテンスをたれながしにしてしまう。「けども」は、そのとき助っ人として登場してくるのではないか。

探偵エリコの推理は、その二歩めをすすめる。

ところが、である。

ある日私が耳にしたのは、才色兼備をうたわれる、ある女性キャスターの発言。さすがに連発はしないが、時々、適当でないところにも、この「けども」を使うのである。

ここでは、表面上は、皆さんと一緒に考えてみましょうというニュアンスと、一方で、自分自身の立場をはっきりさせることができない迷いが、感じられた。

そういう意味では、アシスタント役の女性たちにも、「けども」はよく使われる。発言しようにも、ホスト役に主たる発言内容を枠づけされてしまい、自分自身の言葉を「……けども」でしか語れないのだ。

それにしても、「けれど」か「けれども」ならわかるが、「けども」と短縮されるのは、美しくない。かつてアナウンサーを落ちこぼれた私が言っているのだから、間違いはない。

迷いがありながら、視聴者の皆様あるいは相手役の男性には嫌われてはいけないので、言葉をのんでしまう。そこに「けども」が唐突に出現している、と私は推理の第三歩を記した。

ここに至って、私は、「けども」こそ、現代の思潮を解くキーワードだと、こう結論づけたのである。

一　一対一の会話には慣れているが、不特定多数の人物に語りかける術は未熟である。

二　頭はあまりよくないが（あるいは頭がいいことをみせられない立場だが）、情報だけはたくさん持っている。

三　かかる人物の、不特定多数（たとえば視聴者）又は相手役に対する、口語上の矜持と媚態。（自分はあなた方とは違うんだよと言いたいが、言って嫌われたくない。付かず離れずでいたい）

四　「けども」を、もともとの逆接的な意味から、順接的な意味に使うことによって、斜に構える気分をそれとなく表わす。

アイドルタレントからキャスターまで、自信なさげでありながら、自信をほのめかす、「けども」の使い手であふれている。

快不快でいえば、こんなに耳障りな言葉はないと思うが、善悪を語ろうとすると、難しい。

FF現象はなやかなりし、この大衆社会にあっては、人々は、特権的な階層の出現を許そう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.